

# 病性鑑定課業務の推移と今後の課題

紀北家畜保健衛生所

○黒田順史 石井陽子

鳩谷珠希 上田雅彦 嵩秀彦

## 《はじめに》

病性鑑定課の業務は、県内全域を対象に家畜伝染病を疑う疾病およびその他疾病の発生があった場合に、各部門（細菌、ウイルス、生化学、病理）で精密検査を実施し、原因究明ならびに診断をする病性鑑定や、農家等から依頼された検査および家畜伝染病予防事業などの事業の検査を主に行っている。平成10年以降、国内で口蹄疫、牛海綿状脳症（BSE）ならびに鳥インフルエンザの発生があり、家畜衛生を取り巻く状況が大きく変化してきている。また、消費者の畜産物の安全性に対する意識も大きく変化してきている。

このような中、病性鑑定課の業務も時代にあった変化をする必要があると思われる。そこで、過去10年間の病性鑑定課の業務について、その傾向を分析し、今後の病性鑑定課の方向性や課題について検討した。

## 《方法》

平成10年度から平成19年度の10年間について和歌山県の家畜飼養頭羽数と飼養農家戸数の推移を調査した。また、この期間の病性鑑定件数と病性鑑定結果をまとめるとともに、血液検査・糞便検査・乳房炎検査などの依頼検査件数および家畜伝染病予防事業や家畜衛生対策事業などの検査項目数について調査し、それらを比較した。

また、病性鑑定課以外の家畜保健衛生所（家保）職員に対して病性鑑定課についてのアンケートを実施した。アンケートは、①病性鑑定課のイメージは？②病性鑑定課に何を求めますか？③病性鑑定課に異動したいと思いますか？④病性鑑定課職員はもっと現場に出るべきですか？⑤どの家畜の病性鑑定および検査を充実させれば良いですか？という5つの問いを庁内メールで依頼する方法で実施した。その結果を参考に今後の病性鑑定課の方向性や課題について、病性鑑定課職員間で話し合い検討を行った。

## 《結果》

和歌山県の家畜飼養頭羽数（図1）と家畜飼養農家戸数（図2）は年々減少傾向にあった。

病性鑑定件数については、平成14年度まで減少傾向であったが、平成15年度に増加し、その後再び減少傾向にあった（図3）。家畜別では、平成10年度は牛の病性鑑定件数の占める割合が多い傾向にあったが、山口県で鳥インフルエンザの発生があった平成15年度以降では、鶏の病性鑑定件数の占める割合が多い傾向にあった（図4）。

病性鑑定結果では、牛では平成10年～11年度にはアカバネ病が流行していて、BVDやIBRの発生もあり、豚ではPMWSなど、鶏ではロイコチトゾーン症などの発生も認められた。また、アイガモのボツリヌス症やイノシシのサツマイモ黒斑病菌による中毒なども認められた（表1）。平成15年度以降は、牛ではキアリ奇形やマイコプラズマ性中耳炎など、豚ではレンサ球菌症など、鶏ではIBの発生があり、ポニーの化膿性気管支肺炎やウサギの打撲死なども認められ、そ

の年により診断される疾病は様々で病性鑑定件数もその年によって異なっていた(表2)。

依頼検査件数は、平成14年度まではほぼ横ばいであったが、平成15年度から増加傾向にあった(図5)。家畜別では病性鑑定と異なり、牛の依頼検査が多い傾向にあった(図6)。

事業の検査項目は BSE、鳥インフルエンザ、ウエストナイルなどの検査で近年増加傾向にあった(図7)。

アンケート調査では19名中16名の回答があり(回答率84%)、①の質問には、表3のように、家畜衛生の要、スペシャリスト集団、高度な知識が必要そう、独立した部署など家保の他の課とは違う特殊な課で難しそう、というイメージが多く寄せられた。

②の質問には、表4のように、正確性・迅速性という意見が多く寄せられた。

③の質問には、図8のように病性鑑定課に異動したいと思わないという意見の方が多く寄せられ、特に家保の主査以下の若手職員で異動したいと思わないという意見の割合が多い傾向にあった。

④の質問には、図9のように病性鑑定課職員はもっと現場に出るべきだという意見が多く寄せられ、病性鑑定課のある紀北家保の職員では100%出るべきだという意見であった。

⑤の質問には、図10のように鶏の病性鑑定および検査を充実させればよいという意見が多く寄せられた。これは鳥インフルエンザの影響によるものと思われたが、すべて大切という意見も多く寄せられた。

#### 《まとめおよび考察》

近年、鶏の病性鑑定件数が多い傾向にあるのは、鳥インフルエンザの影響で養鶏農家が異常を認めたときにすぐに連絡してくることが多くなったためと思われた。依頼検査で牛の検査が多い傾向にあるのは、和歌山県の家保が診療業務を行っているという特徴が影響しているものと思われた。

家畜飼養頭羽数が減少傾向にある中で検査業務は増加傾向にあり、アンケート結果からも迅速で正確な鑑定が求められ、また現場へもっと出るべきだという意見も多く、病性鑑定課に対する要望が高いことを認識させられた。このような中で、病性鑑定課に異動したいと思う若手職員が少ないことから、もっと魅力を感じる課になることも必要であると思われた。

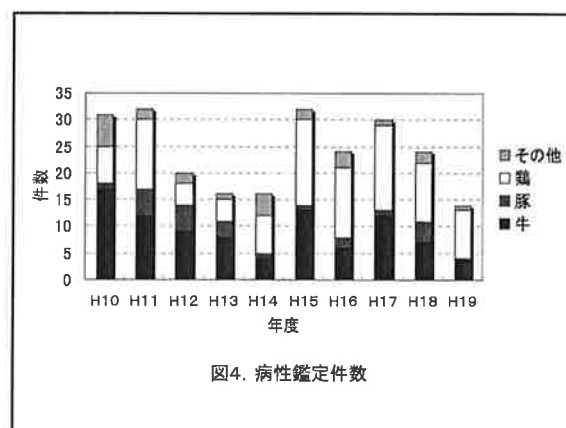
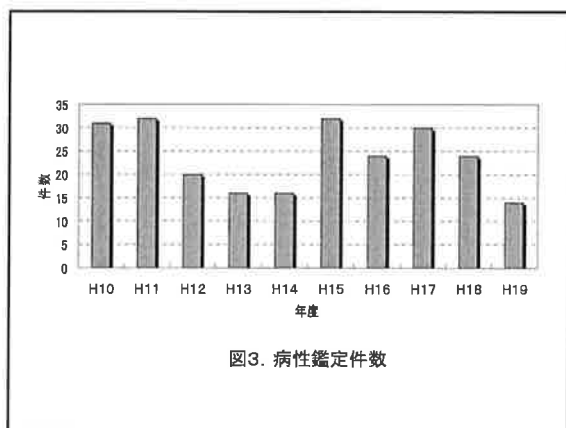
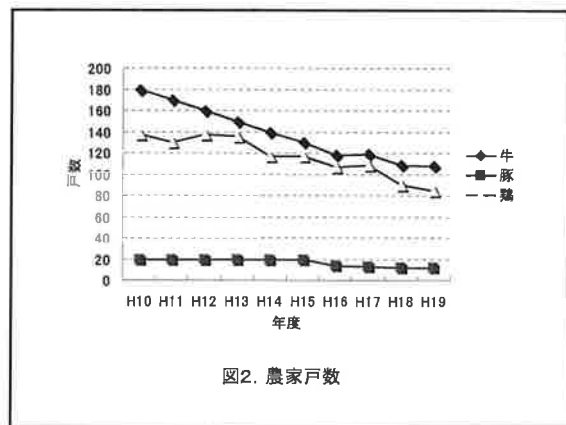
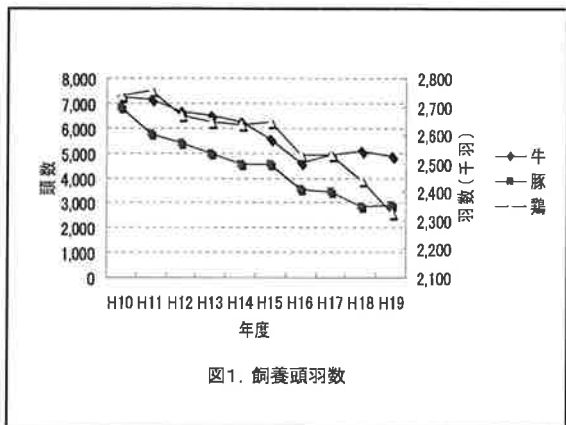
本年度リアルタイムPCRを導入し、さらなる迅速診断に役立てたいと考えているとともに、鑑定結果を鑑定終了後だけに文書で報告するのではなく、鑑定の途中経過を週一回程度、紀北家保内の供覧や紀南家保へはFAXやメールで報告するような体制にしていきたいと考えている。

しかし、迅速診断のためには、必要な検査資材がすぐに手に入ることが重要だが、今のシステムでは必要なときに欲しい検査資材がすぐに手に入らないという問題や、業務量が増えれば増えるほど洗い物が多く、それらに時間が取られるなどの問題もある。これらのことについては、病性鑑定課だけでは対応が難しいため、関係機関と協議し、体制整備を勧めていく必要があると思われた。

今回の調査やアンケートで、病性鑑定課は病性鑑定が基本であることを再認識させられた。家畜伝染病の発生予防や防疫活動を円滑に進める役目もになっている病性鑑定について、迅速で正確な診断を今後も日々心がけていくことが重要で、さらなる知識の習得と技術の向上に努めていきたいと考えている。また、病性鑑定結果をできるだけ現場で説明し、結果のフォロー

や状況把握を積極的に行っていきたいと考えてる。

また、業務量が増えている中、現場家保でできる検査はできるだけ現場家保でやってもらうために検査技術の伝達を行う機会をできるだけ設けていきたいとも考えている。これらのことを実施することで、より良い病性鑑定課にしていきたい。



	H10	H11	H12	H13	H14
牛	アバネ病 アイウイルス感染症 乳頭賞線虫 O26大腸菌症 IBR	アバネ病 白筋症 悪性水腫 内水頭症 脊髄空洞症	特発性流産 白筋症 第四胃気泡症 破傷風 IBR	特発性流産 BVD 牛RS 破傷風	特発性流産 幽門狭窄
豚		浮腫病 胸膜肺炎 レンサ球菌症	豚肺炎症 マイコプラズマ肺炎	繊維素性 壊死性腸炎 PMWS	
鶏	大腸菌症 コクシジウム症 壊死性腸炎	大腸菌症 脊椎すべり 腸捻塞	大腸菌症 急性肺炎 ツセロン中毒 尿酸沈着症	卵壁 コクシジウム症 ロコトゾン症	大腸菌症 マレック病 AE SHS
その他	ナンテン中毒 (山羊) くも膜下出血 (イソジ)	腸重積 (山羊) ネツリス症 (アイゴモ)		壊死性腸炎 (山羊) サウマイ黒斑病 による中毒 (イソジ)	

	H15	H16	H17	H18	H19
牛	特発性流産 BVD Arcanobacterium pyogenes感染に よる腫瘍	特発性流産 破傷風 バズレラ症 第四胃急性拡張 牛ロタ	キリ奇形 ビタミンA欠乏 牛コロナ	特発性流産 牛白血病 牛RS 腎不全	特発性流産 化膿性肺炎 サルモネラ症 マイコプラズマ性 中耳炎
豚	レンサ球菌症	特発性流産 バズレラ症 PMWS		豚胸膜肺炎 豚鞭虫症 豚緑膿菌症	
鶏	大腸菌症 コクシジウム症 IB ブドウ球菌症	大腸菌症 コクシジウム症 IB マレック病 鶏白血病	IB マレック病	大腸菌 コクシジウム症 マレック病 ブドウ球菌症	大腸菌症 IB 内部寄生虫症
その他		化膿性気管支肺炎 (ホニ)	打撲死 (ウサギ)	ヒゼンダニ・顎口虫 (イソジ) くる病疑い (アヒ)	

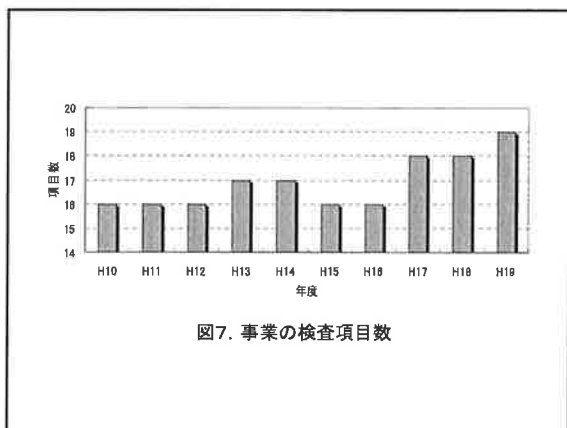
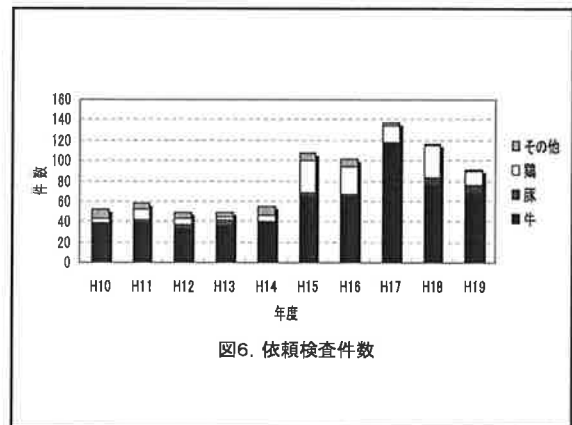
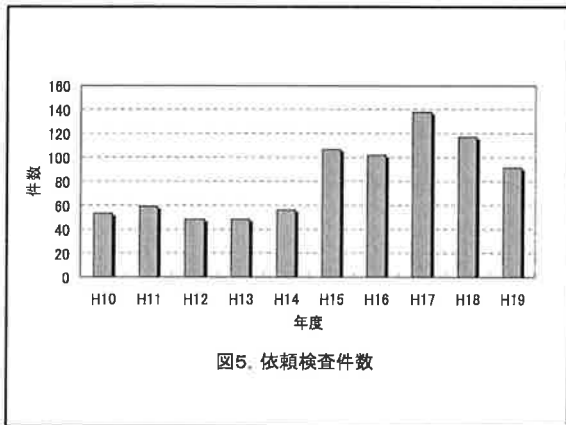


表3. ①病性鑑定課のイメージは？

家畜衛生の要	家保業務の中で欠くことのできないポジション	
スペシャリスト集団	家畜衛生検査のスペシャリスト	
高度な知識が必要そう	敷居が高い	奉るイメージ
独立した部署	孤立的・専門的	
忍耐強い	コツコツ	異動直後の業務が難しそう
日々何をしているかよくわからない課		
寒い	青色	よくわからない

表4. ②病性鑑定課に何を求めますか？

正確・迅速	できるだけ迅速な診断結果	
スピード	迅速性	的確な鑑定
迅速かつ正確な検査	検査結果がでるまでのスピード	
最新知見の収集	鑑定結果のコメント充実	
幅広い病性鑑定技術	検査できる項目の充実	
結果に対する考察・フォローの充実		
専門的知識を活用した現場指導への助言		
依頼しやすい環境づくり	積極的な協力	一体感

